

# 「国語の力」の成立過程

XIV

— 国語教育学説史研究 —

野 地 潤 家

一五

「国語の力」第二章は、「文の形」を中心に論が展開されていて、「国語の力」全編の中核をなしている。その第一四節は、「形の見える文」となっていて、著者垣内松三先生は、まず、「『文の形』ということとは、誤解を招き易い方であることを度々経験する。こゝにいう文に見ゆる形は事物的な形をいうのではない。即ち自然の光景とか人物の肖像を見ることをいうのではない。それは文の形が会得されると共に自然に取得せらるゝのであって、茲に文の形を見るところは、作者の意識の流動を形に見ることをいうのである。」（有朋堂版「国語の力」、一一八頁）と述べ、作者の意識の流動を形に見ることのできる文章例を三つ引き、それぞれに所見を添えられている。

はじめは、新井白石の「折たく柴の記」から、つぎのような一節が引かれている。

我が父致仕の後、事にふれてのたまひたりしには、蘆沢といひしものは幼き時に父におくれしを、その父の遺領給うて、近くめしつ

かはれしに、それより二十歳ばかりに及びし頃に、我を召すことありて参りしに、戸部は物に腰かけて、太刀を横たへておはします。

その気色常にかはりぬと思ひしに、近くまゐれとありしかば、腰刀をとりて参らせんとせしに、そのまゝにて参れとありしによりて、近くまゐりしに、たゞ今、蘆沢を召出して手づから誅すべし。それにさふらふべしとのたまひ出したり。答へ申すこともなくてありしに、やゝありて、いらへ申すこともなきは思ふ所やあると仰せられしほどに、さん候、かれが常に申候ひしは、いとけなき時に父におくれし身の、莫大の主恩によりてかくまでに生長しぬ。此恩に報いまるせん事、よのつねの人々の如くしてはかなふべからずと申す。天性不敵なるものの、しかも年なほ少くしてをこのふるまひも多く候へば、いかなる奇怪をか仕出して候ひぬらん。但し若く候ふ時にかれらが如くなるものにあらずしては、年たけ候ひし後にもの用にたゞぬもの多く候か。これらの事を存じめぐらし候につき、御答の遅れ候ひしは恐れ思ふ所に候と申す。また、のたまひ出す事もなく、我もまた申す事もなくてさふらふほどに、やゝありて面に蚊の集りぬるに逐ふべしとのたまひしほどに、顔を動かしけれ

ば、血に飽きて胡蝶子のごとくなりし蚊の六つ七つはらくと地に墜ちしを、懐の紙とり出して、つゝみて袖にしてさふらふ。またやゝありて、罷り歸りて休み候へとのたまひしかば退出す。(折たく柴の記) (有朋堂版「國語の力」、一一九―一二〇べ、読点の脱落したものについては、引用者において補った。)

右の文章は、新井白石著「折たく柴の記」の巻上、祖父母および父母の事蹟を述べた部分に収められている。宮崎道生博士の「定本折たく柴の記釈義」(昭和39年6月10日、至文堂刊)によれば、便宜項目名が付せられている。右の文章は、たとえば、つぎのような位置に置かれていたのである。

一 序

二 祖父母および父母の事蹟

一 祖父母の事 二 父の土屋侯への出仕

三 父の行状 四 父の勤務状況

五 父の苦讀―藤沢某の事

六 蛇太刀・猿引二宝刀の事 七 きりはの腰刀の由来

八 帯刀についての庭訓 九 朝比奈某の誓

一〇 老耄期の生活態度についての庭訓

一一 父の容貌・言語・趣味・嗜好 一二 父の最後の武勇談

一三 取廻についての庭訓 一四 高滝某の事

一五 越前某の事 一六 郡司正信の事

一七 土屋侯祖先の事 一八 神戸の家の事

一九 新井の家族 二〇 母の事―出自・性行・教養

二一 父の土屋家致仕・禁錮の処分

二二 妹および母の死去 二三 土屋頼直の除封・子達直の相続

二四 父の終焉 二五 庭訓二条

(同上書「目次」による。)

前掲の文章につづいて、「折たく柴の記」の本文は、なおつぎのようにつづけられている。

かの男は、常に酒をこのみて、酔みだれぬる事ども有しかば、関といひし人の、それにしかりしをかたらひて、二人してまづ酒を断しめて常にいさめし事共おこたらず。かくて年月経しの中に、つるに父の職をも仰慕りたりき。今は戸部もうせ給ひぬれど、はじめ、我申せしことばの、むなしからざるやうに、つかへまいらせよと思ふなり」とのたまひたりき。これは、かの人久しくして、また酌酒の事ありしが故也。(日本古典文学大系「折たく柴の記」、一六〇―一六一べ)

「國語の力」には、本文のまとまった段落全体を、きっかりと引用されたのではなく、おわりの部分が省略されていたわけである。書き出しの「我が父致仕の後、事にふれてのたまひたりしには、」に、結びとして照応しているところが省かれているのである。

引用上、こうした問題点を持つてはいるが、前掲「折たく柴の記」の本文に対して、垣内松三先生は、つぎのように述べられた。

「この文に現れたる緩やかなる叙述の進行の上に、作者の意識が見えるのである。森田思軒が此文を評して、此意味をのみ伝えようとするのならば、僅かに敷衍を以て尽すことができるが、このいかにも落つた叙述の上に文の妙味があるといわれたのは、文を一つの報告とは見ないで、その生死を前にした沈黙の光景を体験した

作者の意識の流動が、文の上に鮮かに現われて居ることを見たものであろう。形の見える文というのは、文の形式に於ける彫刻的・繪画的な古典的印象を感じしむる文をのみいうのでなく、そのような Loose sentence の音楽的な流動の上にも文の形を見るのである。」

(有朋堂版「国語の力」、二〇一—二二二)

垣内松三先生は、新井白石の前掲文章に見られる、「緩やかなる叙述の進行」に着目し、そこに作者の意識が見えるとされている。すなわち、「生死を前にした沈黙の光景を体験した作者の意識の流動が、文の上に鮮かに現われて居ること」を重く見ていられるのである。もっとも、「生死を前にした沈黙の光景を体験した」のは、作者(新井白石)ではなく、作者の父であり、父から聞いたわけであるが、体験者である父の物語りによる叙述ぶりに、おのずと意識の流動がうかがわれるのである。

垣内松三先生は、森田思軒の鋭い文章鑑賞・批評に触発されて、そこから、この白石の文章を、「形の見える文」の具体例として挙げられたようである。(森田思軒のこの批評の出所については、別の機会を期したい。)そこに、「Loose sentenceの音楽的な流動」を見られたのである。

森田思軒の批評力については、徳富蘇峰翁が、かつて、つぎのように述べている。

余は文壇の批評家として、最も思軒居士に推服す、思軒言はず、言へば往々にして中る。思軒の頭脳は、鋭にして敏、精にして明。思軒は大体に通ず、時勢に通ず、故に其の言、文人迂腐の酸味なし。

思軒の文章は、及ぶ可し。其の会話は及ぶ可らず。

思軒の眼孔は、直ちに事物の根底を射る。思軒は一種の直覚力あり。

思軒は到底創作家にあらず、到底数でこなす的の作家にあらず。思軒の識訳は、余りに念入り過ぎて、却て粘皮の痕あり。

思軒の文章は、字烹、句鑄。恰も磨き竹を以て、建仁寺垣を結びたるが如し。

批評家として、一の欠点は、思軒の博覽浩聞ならざるにあり。

思軒は林西仲派の批評家にあらず、金聖嘆派の批評家なり。唯だ彼が如く、毫も牽強附会ならざるのみ。

思軒若し漢字の素養に匹敵す可き、欧文の素養を以てせば、其の進境如何ぞや。

思軒は識に於て、近世思想を解得ず、学に於ては未だし。

思軒の学は漢七欧三、若し之を顛倒せば、恐らくは今日の思軒にあらじ。

思軒の小説は、御姫様が味噌越提げて、豆腐買豆腐買に赴く風情あり。思軒の文は、淡中風味あり。鍛練の文、一字、一精神。故に思軒多く作らず。

余は思軒少時の文を愛読したりき、気焰あり、高興あり。其の北京紀行の如き、歐洲通信の如き、殆んど驚目せざるものなし。

『埃及原頭夕照崩』の句を記憶したり、今や其の前後を忘れぬ。

(「思軒全集」巻一、明治40年5月1日、金尾文測堂、六―七)

これは、明治二八年初冬の交、森田思軒について述べたものといふ。思軒の批評家としての特性が鋭く道破されている。

新井白石の文章、なかならずその散文については、桑原武夫氏

が、その論考「日本の百科全書家新井白石」の中で、つぎのように述べている。

「和歌・俳諧が日本文芸の主流と想定されており、また事実樂式部・西鶴・芭蕉以来、主流はそこにあつたので、こんにちでも文学と言えば、散文の場合でも、その系統のものを考える傾向が一般に、とくに国文学界には強く残っている。したがって、たとえば『奥の細道』『幻住庵の記』などの詩的散文が賛美されることは毎度のことであるが、新井白石の散文の美しさに言及されたのを見ることはほとんどない。通俗的な分類をすれば、文章には女性的散文と男性的散文とがある。その一方のみを賛美することは、日本文化の将来のために適当とは言えないであろう。そのいずれを好むかは、究極において趣味の問題ではあるが、その前提に立って言えば、私は、『折りたく柴の記』『藩翰譜』などの名文は、その簡潔・雄勁さにおいて、日本散文史上の誇りとすべきものと考えている。

一般に女性的散文の名手と信じられている谷崎潤一郎が、『折りたく柴の記』『読史余論』『藩翰譜』の文章を賛美していることを読者は知っているであろうか。

まず、白石がローマからはるばるキリスト教をひろめに日本にたどりついたシドッチを尋問した『西洋紀聞』中の一節を引いてみよう。

『男子が国命をうけて万里の旅に出る。一身を顧みないことは言うまでもない。しかし、おまえの母はすでに年老い、おまえの兄もまた年はすでに壮年ではありえまい。おまえは心中このことをどのようにに思うのかと尋ねると、しばらく答えることもなく、憂いをう

かべて、からだをさすりつつ答えた。はじめ、一国の推挙と師の命令をうけてから、なんとしてもその命令をこの日本において達成しようと思うほかに考えることもなく、年老いた母も兄もまた、私の今回の試みは、教えのため、国のため、これ以上のしあわせはないと喜びあってくれました。しかし、このからだのすべては、父母兄弟の分身でないところはあります。この身の生きているかぎりは、どうしてこのことを忘れることがありません。と答えた』

私は、このように簡潔にして情深く、意を達するものを名文と言ふべきだと思ふ。

つぎに谷崎潤一郎が推賞し、かつ鑑賞している『藩翰譜』から一文を掲げよう。これは巻四、本多平八郎忠勝の事跡中、長久手の戦いを叙したところである。原文は私の現代語訳よりうまみのあるものと御承知ねがいたい。

『天正十二年四月九日ひるごろ、犬山のかなた、長久手のあたりで、徳川殿と遭遇して味方敗戦と秀吉の陣に伝えてきたので、秀吉大いに怒って、『気がかりなことだ、秀吉が出向いて戦おう、はじめからこの要害を守っていた者はそのままよく守れ、そのほかの軍兵は一騎残らずついてこい』と陣々にふれまわる。馬をひっ立て、鎧をなげかけ、かぶとをつけるあいだに、大將軍の陣で目を吹きならしたので、先陣がはや出立する。

秀吉の旗を門の外におし立てた。二番手、三番手とつづいて、十六番手まで出陣したので、秀吉は楽田をうち立ち、長久手さして馬を走らす。後詰めはなお引きもきらない。本多平八郎忠勝は、このとき小牧の後陣にとどまって守っていたが、このしらせを聞いて、けさからの戦いに味方は疲れたに相違ない。馳せ加わって先陣しよ

うと、手勢を二つにひき分け、なかばはとめおいてここを守らせ、騎兵・歩兵三百人で三隊をつくり、敵の大勢と道を平行して駆けてゆくうちに、その間隔は四、五町にすぎなくなった。それ以上射撃距離が近づいたときは、足軽どもに命令して鉄砲を射ちかけ射ちかけ、静かに馬を走らせた。

このとき、永井与次郎は荒馬を乗りこねて落馬したので、馬はとび上がり、敵に向かって走り去った。永井がそれを追いかけてゆく。忠勝じつと見すえ、一鞭あてて馬を走らせ、永井を馳せ抜き、敵のなかにとびこんで、その馬を取り戻し、永井を乗せて帰っていった。秀吉の兵隊たちが、憎いはきょうの本多のふるまい、馳せよって蹴ちらして通ろうと言ったが、秀吉はあくまで制御して、竜泉寺に到着した。

『平家物語』『太平記』などのむかしは知らず、徳川期になってから、静坐して、あるいは散策しつつ静かに風景を眺める文章はきわめて多いが、人間の行動の激しさを動的に書いた文章はほとんどないと言ってよい。白石の文章は、その例外をなすものと言うことができよう。十三巻におよぶ『藩翰譜』は百余日で書きあげられた。スタンダールを思わせる速筆だが、この速筆性が簡潔な名文の誕生と関係することは『パルムの僧院』の大小説家と一脈相通じるものがある。ことからも推測できる。」（日本の名著15「新井白石」昭和44年6月10日、中央公論社刊、三六一―三八八）

ここでは、新井白石の散文の独自性・特質が指摘され、強調されている。桑原武夫氏の発見とでもいうべきものが、そこにはある。白石の散文がわが国の文章史の上から、全体的に論じられ、かつ位置づけられているのである。

さらに、さかのばれば、白石の「折たく柴の記」の文章批評は、いくつかなされていく。新井白石の研究者宮崎道生氏は、つぎのように引用・紹介をされている。

「本書が国文で書かれていることというまでもないが、国語国文学者の意見によれば、その文体は一家の風をなしてはいるものの、新古雅俗相混じて必ずしも上々とはいいがたいとの事である。例えば、林麴臣氏は、序文に『外ざまの人の見るべきものにもあらねば、ことばのつたなきをも、事のわづらはしきをもえらぶべしやは』とあるのを引いて、『素より句勢文飾に意無く、偏に子孫の爲に親、祖先の在りし事の実蹟を家に遺し伝へんとて唯だその目のあたり、見るが如く真を画くを旨とし、事実にはざるを主として、筆の勢に打ち任せたりしものなり。』といひ、『故に雅き筆づかひ、はた語格、文法の、誤謬、すくなしとせざれど、天真爛漫の筆意、頗る非凡奇絶、作文の模範として価値あり。文勢、雅俗の二体を折衷し、一家の風をなせる者の如し。』（『折たく柴の記講義』）といわれ、また内海弘蔵氏も、文体について『この書の文章は、全篇を通じて、擬古文調の雅文であるが、その後半は前半とやや体を異にして、むしろ時文調のものである』といひ、とくに擬古文調については、『既に一般に文学史家の指摘があるやうに、その古語の用ゐざまも正確でなく、その古文脈をまねた所もところどころおぼつかない所があるといふ瑾を残してゐる』と評し、しかしてその筆致については、『さすがに一代の巨匠の筆になつたもので、そこにはまたおのづから、その気品の凡ならざるものを、しのばせるに足りるともいふべき筆致が見られるのである』といわれ、さらにまた、単に文章そのものの上からいへば、そうすぐれた文章とはいひ得な

かるうが、内容と併せいえば巨人白石の面影をしのぶに足るものがあり、簡潔遒勁な筆致をもつ藤翰譜に比すれば、この書の文章は優雅ではあるが、やや冗漫の弊に陥っている憾をどめているといわなければならぬ、とも評価されている。「『近代名家文集』の解説」(宮崎道生著「定本折たく柴の記釈義」、昭和39年6月10日、至文堂刊、三五―三六頁)

ここには、林麗臣・内海弘藏両氏の批評・評価がとりあげられているのであるが、国語・国文専攻の学者として、さすがに鋭い指摘がなされている。白石の文章の性格が的確におさえられているのである。

宮崎道生氏は、「折たく柴の記」について、「本書は、明治に入り上梓されてからは、非常に多くの読者を持ち、明治三十年代には第一級の代表的日本人として異常な崇拜をかちえていたようで、従って当時、青壮年であった人々には本書は最も親しい書物の一つであるようである。」(同上書、「序」、一頁)と述べ、さらに、その文章について、「本書の平易と遠意と簡潔(漢学的教養が然らしめた)とをかねた文章は、とくに明治の人々に親しまれる理由と考えられるものである。本書が文学的に見ても傑作と称せられるについては、白石が当時における、いな江戸時代全期を通じての第一級の詩人であったという一面を想起する必要があると思う。行文の流暢遒勁、表現の凱切、情景描写の巧妙等々は、偶然にしてそうなっているのではない。殊に上巻(引用者注、『折たく柴の記』の上巻。)に示された彫塑的な筆致は、きわめて魅力的であって、鵲外などが本書を重視したのも尤もと思われることである。」(同上書、四六頁)としるしている。

一方、森田思軒の弟、森田章三郎は、その兄の文章の苦心について言及されているが、柳田泉氏は、そのことを引きつつ、左のように述べられた。

「それだけに文章に苦心したこともはなほだしく、その一端は後藤宙外編の『唾玉集』中の『苦心談』にも見えているが、章三郎氏もこう語っている。

翻訳には随分骨を折った。先づ一応走り読みした上、若し書かれて居る事が現代で無いならば、其時代の歴史を一寸見る。そして其事のあった場所の地理書を見る。それから翻訳にかかる。

翻訳に当りては訳語に苦勞するのみならず、文章に凝る。明治の文士は頼山陽の所謂文章報国の觀念があった。殊に思軒は甚だしかったかも知れぬ。私が同志社に居た頃先輩に、抑も文章の巧拙とは何を標準にするか、一体日常文例えば新聞体の文章では誰を一番巧いとするか、と問ふなら、それは君の兄貴の思軒ではないか、といふた。文章の如きは時代の好尚によりて變化するもので、今日思軒文を以て名文だといつても人は承知せぬかも知れぬが、当時まではまだ旧幕時代の漢字万能、漢学至上の觀念が残存し、漢字駆使を以て文章の第一義としたものである。此点より云えば思軒の文は文章界の第一高峯の一つであつたらう。中江兆民の『二年有半』の内で二ヶ所までも思軒の文に語が及んで居る(以上『書物展覧』七ノ十二号)。

正にその通りであつて、明治前半の文章趣味からいえば、思軒の文章は(翻訳よりも、むしろその隨筆雜録の文章において)明治文章界の最高峯に立つものであつたにちがいない。」(『明治初期翻譯文学の研究』、昭和36年9月15日、春秋社刊、「森田思軒伝記

稿)、四三六べ)

明治前半期の文章趣味からいえば、森田思軒の文章は、最高峰に立つものとされている。そういう文章力を持つ森田思軒にして、よく白石の「折たく柴の記」の前掲文章(「父の苦諫」の条)の妙味を取ることができたのであろう。明治期において、新井白石の文章が重視され、愛読されたことも、白石と思軒との出あいを可能にしたと思われる。

前掲「折たく柴の記」の文章中、「また、のたまひ出す事もなく、我もまた申す事もなくてさふらふほどに、やゝありて面に蚊の集りぬるに逐ふべしとのたまひしほどに、顔を動かしければ、血に飽きて胡蝶子のごとくなりし蚊の六つ七つはらくと地に墜ちしを、懐の紙とり出して、つゝみて袖にしてさふらふ。」とあるところ、とくに傍線部については、血を吸い飽きた蚊がぐみのようになつてはらはらと地に墜ちるさまを、目に浮かぶように写し出している。

垣内松三先生が、「形の見える文」の具体例の一つとして、新井白石の「折たく柴の記」の前掲文章を挙げられたのは、「緩やかなる叙述の進行の上に、作者の意識」の流動のうかがわれる適例とみることができ、そこに森田思軒による触発があったとしても、垣内松三先生の文章把握力の非凡さが認められる。

つぎに、垣内松三先生は、「形の見える文」の例の二つめを、左のように掲げられた。

或は曰く瞑想は独語也と。加へて曰はむ、独語は祈禱也と。祈禱

をして常にわれ知らず心の底より迸り出づる天眞の独語たらしめよ。かくてそは如何ばかり美はしく且力あるべき。

無念無想の祈あり。言ひがたき嘆きの祈あり。涙にあまる思慕の祈あり。一言の祈あり。千万言の祈あり。奮闘向上の祈あり。感謝平和の祈あり。すべて真心より出づるものは皆祈也。

密室の祈もとりよし。堂々たる天下の広居に立ちて億兆民衆と偕に一心の誠を天地の大靈に聴えまつるの祈に至りては、崇高のこゝろ極れるかな。(網島梁川)有朋堂版「国語の力」、(一一一べ)

右の網島梁川の文章は、その若「回光録」(大正14年6月12日、春秋社刊、初版は明治40年か。)に収められている。「断光録」の中の一編であつて、「祈禱」という題下に書かれている。ただし、原文では、最初の段落がつぎのように構成されている。

或は曰く、瞑想は独語也と、加へて曰はむ、独語は祈禱也と。祈禱をして常にわれ知らず心の底より迸り出づる天眞の独語たらしめよ、かくてそは如何ばかり美はしく、且つ力あるべき。かくはいへど、予は又かの一切の儀式的器械的職業的祈禱を排すと謂ひて、放心慢意、竟に祈禱の真風光に参じ得ずして已むものあらんを悲しむ。形式の祈禱、時に吾人を導いて道交の奥蘊に参せしむることあり。かの始めは幾んど無意義、器械的に称名念仏するものが、声々次第に光明を帯び、精彩を著け来たりて、一念いつしか打成一片の信三昧地に躍入することあるの理を想ふべし。

(同上書、六一べ)

右の傍線部以下は、「国語の力」には引用されていない。省略されて、すぐつぎの二・三の段落が引かれているのである。作者の意識の流動を見ようとするのならば、原文のまま、省略をしないで、意識の流動を感じし看取しなければならぬ。しかし、右の文章では、第一段落の後半が省かれている。二・三段落の文章の流れと第一段落のそれとを均衡のとれたものとして並べるためには、第一段落の後半に、いくらか冗長のきらいがあつたのであろうか。——右の文章（「祈禱」）は、明治三十九年二月の作とおもわれる。

さて、垣内松三先生は、前掲の綱島梁川の文章について、「この文に現はれたる意識の流れは、ところ／＼に止まりてはまた流れ出づる形として現れて居るけれども、その句の終るところに、深い停音を味読するならば、それを透して作者の深遠なる体験の姿を見るであろう。」（有朋堂版「国語の力」、一二一—一二二頁）と述べられ、独自の読みの姿勢が示されている。作者の意識の流動に即して、「その句の終るところに、深い停音を味読するならば」という、停音味読論は、やはり垣内松三先生の読みとりの平浅でなかつたことを語っている。

「句の終るところ」とは、句点（。）のうたれているところと解しうるとすれば、梁川の原文の句読点は、つぎのようになっていた。

### 祈禱

或は曰く、瞑想は独語也と、加へて曰はむ、独語は祈禱也と。祈禱をして常にわれ知らず心の底より迸り出づる天真の独語たらしめよ、かくてそは如何ばかり美はしく、且つ力あるべき。（後略）

無念無想の祈あり、言ひがたき歎きの祈あり、涙に余る思慕の祈

あり、一言の祈あり、千万言の祈あり、奮闘向上の祈あり、感謝平安の祈あり。すべて真心より出づるものは皆祈也。  
密室の祈もとよりよし、堂々たる天下の広居に立つて、億兆民衆と僧に一心の誠を天地の大靈に聴こえまつるの祈に至りては、崇高のこころ極まれるかな。（同上書、六一—六二頁）

右の原文では、読点（、）がかなり多く使われていて、句点（。）は、それぞれの文をひきしめるかのようにうたれている。その面では、「国語の力」に引用されている文章の句読点のうちかたと、ことなっているところが見られる。作者（梁川）の意識の流れと息づかいとは、微妙なちがいを見せるであろう。それは厳密に言えば、垣内松三先生みずから言われる、「その句の終るところに、深い停音を味読する」、その味読のしかたにもかわりをもつてくる。——「国語の力」に引用されている文章と梁川の原文との間には、そうした句読点のうちかたのちがいのあることを指摘しておきたい。

ここで、垣内松三先生が挙げられたような文章例は、前掲「祈禱」とほぼ同じ時期に書かれた、「自然」というのにも見いだされる。

### 自然

春は歌ひ、夏は働き、秋は考へ、冬は徹す。徹して而して歌ひ、歌うて而して働き、働きて而して考へ、考へて而して徹す。大河の水と流れ、梵音の響きと続き、一気貫貫、自置しばらくも息まざるもの、是れ「自然」てふ大いなる靈魂の呼吸（いんき）にあらずや。

歌ふや充実す、春海洋々たり。働くや充実す、夏雲滄々たり。考



ふるや充実す、秋の野に千里空明の觀念平かに、徹するや充実す、冬の空に涅槃実相の姿円かなり。

自然の運行は歩々節々悉く充実して、一瞬やがて三世を渦まき盡る。「古池」に「蛙飛び込む水の音」は、声々やがて久遠に響き連らなる転法輪にあらずや。鳶飛び、魚躍り、風吹き、水流る、自然の何物か、これ一気の充実ならざる。充実は即ち誠也、誠は即ち天地の大悦也。

神を信するものは人を信じ、人を信するものは「自然」を信す。

かくて我等は熱き涙を頭石の面に灑ぎ、優さしき念ひを荒海の胸に抱くを得るなり。(同上「回光録」、六〇ペ)

ここにもまた、梁川の文章における作者の意識の流動をうかがうことができよう。かたちの上からは、前掲「祈禱」よりも整っている。垣内松三先生は、網島梁川の文章の特性(「文の形」)を、よく見抜いていられたといえる。

——網島梁川はまた、「真理と人格の趣味」という文章において、「人を動かす真理の底には常に人あり。」ということ、「真理てふ抽象普遍の内容を包むに、人格の趣味てふ具象特殊の詮表形式を以てして、其は始めて力あり、光輝ある全備の真理たるなり。」と述べ、また、「人格の趣味たらざる、人格の趣味として詮表せられざる真理は、力なき真理也、空名の真理也。」として、その末尾を、福沢諭吉の「福翁百話」に例をとりつつ、左のように結んでいる。

「予輩が『福翁百話』に心折措かざる点ありとせば、そは其の包含せる真理そのものの上にあるよりも、寧ろ其の真理詮表の姿態が福翁てふ特殊なる偉人格の趣味と相渾融して、『福翁百話』是れ福

翁なる乎、福翁是れ『福翁百話』なる乎の概ある所にあり。福翁その人を離れて『福翁百話』はあらず。『福翁百話』の真理は、毫も外より貼付せられ糊塗せられたる痕を著けず、直ちに福翁の人格そのものより生ひ出で茂り栄えたるの観あるなり。福翁一代の心の味ひを言ひあらはしたるもの、やがて『福翁百話』の真理也。こゝには、人と真理と合して一たり。さればこの書の一句一節を断ち離して見るも、尚ほ福翁の意気声容、颯として人に迫り來たるものあるにあらずや。直截にいへば、『福翁百話』の真理は余りに常識的なり、平凡なり、俗智的なり、而かも尚ほそが煙波限りなきの趣きを具へて人を引著する力あるは畢竟其が福翁てふ特殊の人格を通して特殊の詮表を得たるが故にあらずや。そこには游泳あり、体達あり、自得あり、支配あり、『福翁百話』一篇、要するに是れ福翁人格の趣味の詮表にあらずや、結晶にあらずや。是くの如くにして平凡なる真理も光彩を著け、旧き真理も新らしき力を贏得す、文章運用の能事こゝに見るべく、真理詮表の要訣畢竟亦こゝにある乎。(明治三十九年三月) (同上「回光録」、七八―七九ペ、傍線は引用者。)

右の文章によって見れば、網島梁川もまた、福沢諭吉の「福翁百話」に、福翁の意識の流動を見抜いていたことがわかる。垣内松三先生の文章における「形」のとらえかたは、すでに網島梁川によってそのまま実践されていたとも考えられるのである。

さて、垣内松三先生は、右に見てきたように、新井白石・網島梁川の文章例を掲げつつ、それぞれ二つの文章の読み方に言及してのち、つぎのように述べられた。

「これ等の文を読み、文字の上に現はれたる形を捉へることに

のみ没頭すれば、どうして、その内面に拡がる作者の精神を透見して、その手がかりから広大な世界を透見することができようか。緩やかな文、きりつめた文の形は人工的加巧の上の問題でない。それでなければ現わし得ない必然があるからである。その一字一語を味うことではければ、そうした形によりてのみ現わされる意識の流動を観取することはできない。」(有朋堂版「国語の力」、一二二頁)

「文の形」、緩やかな文章にしても、きりつめた文章にしても、それは単に人工的加巧上の問題でなく、そのような「形」でなければ現わしえなかった必然性があるはずである。そうした「形」によってのみ現わされる意識の流動を観取し、内面世界を透見しなければならぬ。文章表現の必然性にそうて、その一字一語を味わっていかなければならない。垣内松三先生の「文の形」をとらえる解釈作用のとらえかたは、ここに明確にされている。

つぎに、垣内松三先生は、「形の見える文」の三つめの例として、「紫式部日記」から、左のように引用された。

秋のけはひのたつまゝに土御門殿のありさまにはてかたなくをかじし。池のわたりのこずゑどもやり水のほとりのくさむらおのがじし。色づきわたりつゝおほかたの空もえんなるにもてはやされてふだんの御読経のこゑゝあはれまさりけり。やうゝすゞしき風のけしきにもれいのたえせぬ水のおとなひ夜もすがらきゝまがはさる。

御前にもちかふさふらふ人々、はかなき物かたりするを聞こしめ

しつゝ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなし<sup>て</sup>もてかくさせ給へり。

御ありさまなどのいとさらなる事なれど、浮世のなぐさめにはかゝる御前をこそたづねまゐるべかりけれとうつし心をひきたがへ、たとしへなくよろづわするゝにもかつはあやしき。

まだ夜ふかきほどの月さしくもり、木のしたをぐらきに御かうしまるりなばや、女官はいまださふらはじ、藏人まるれなどいひしらふほどに、後夜のかねうちおどろかし、五だんの御修法時はじめつ。我もゝとうちあけたるばんそうの声々とほくちかくきゝわたされたる程おどろしくしたふとし。観音院の僧正ひんかしのたいより、二十人の伴僧をひきゐて、御かちまゐり給ふあし音、わたどののはしのとどろゝとふみならさるゝさへぞことゝのけはひにはにぬ。法住寺の座主はうまばのおとど、へんちじの僧都はふどのなごにうちつれたる淨衣すがたまでゆゑゝしきからはしどもをわたりつゝ、木の間をわけてかへりいるほどはるかに見やるゝこゝちしてあはれなり。さいざあざりも大ゐとくをうやまひてこしをかゞめたり。人々まるりつれば夜もあけぬ(紫式部日記) (「国語の力」、大正11年5月30日、三版、一一九～一二二頁)

右の本文は、のちに、読点が多くうたれるようになる。念のため、左にそれを引用する。

秋のけはひのたつまゝに、土御門殿のありさま、いはんかたなくをかじし。池のわたりのこずゑども、やり水のほとりのくさむら、おのがじゝ色づきわたりつゝ、おほかたの空もえんなるに、もてはや

されて、ふだんの御読経のこゑ／＼あはれまさりけり。やう／＼すゞしき風のけしきにも、れいのたえせぬ水のおとなひ、夜もすがらきゝまがはさる。

御前にもちかうさふらふ人々、はかなき物がたりするを聞こしめしつゝ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせ給へり。

御ありさまなどの、いとさらなる事なれど、浮世のなぐさめに、かゝる御前をこそたづねまゐるべかりけれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなく、よろづわするゝにも、かつはあやしき。

まだ夜ふかきほどの月さしくもり、木のしたをぐらきに、御かうしまゐりなばや、女官はいまださふらはじ、藏人まゐれなどいひしるふほどに、後夜のかねうちおどろかし、五だんの御修法、時はじめつ。我も／＼とうちあげたるばんぞうの声々、とほくちかくきゝわたされたる程、おどろ／＼しくたふとし。観音院の僧正、ひんがしのたいより、二十人の伴僧をひきみて、御かちまゐり給ふあし音、わたどののはしのとゞろ／＼とふみならさるゝさへぞ、ことところのけはひにはにぬ。法住寺の座主はうまばのおとゞ、へんちじの僧都は、ふどのなどに、うちつれたる浄衣すがたにて、ゆゑ／＼しきからはしどもをわたりつゝ、木の間をわけてかへりいるほど、はるかに見やらるゝこゝちしてあはれなり。さいぎあざりも、大るとくをうやまひて、こしをかゞめたり。人々まゐりつれば夜もあけぬ。(紫式部日記) (「困語の力」、昭和4年2月1日、二八版、一三四—一三五)

改版(昭和3年6月25日)を機に、活字を大きくし、右のように

引用文にも、読点を多くしたのであるか。読みやすくしようとの意図に出ているのであろう。

さて、右の「紫式部日記」の本文について、埴内松三先生は、まづ左のように説明を加えられた。

「初秋の気がいつの間にか潜んで近づいて来た。土御門殿の中庭の光景なども日々趣が加はる。庭前を見れば、池の畔の樹、水の辺の草、とり／＼に美しく彩づき、空は高く碧く澄みて静かな秋の気が遍く流れて居る。明敏なる感性を有する作者の印象には、音にも色にも光の印象にも、他の人々に見ることのできない細みがある。『もてはやされて』といふやうな用語の微妙さは他にいひかへられさうもない深さ、と潤ひと精しさとを含んで居る。『すゞしき風のけしき』も古来の註にあるやうに、うちつけに『涼風』ではなくして、『けしき』に耳を澄まして、いろ／＼の物を吹いて秋を囁いて居る雑音の中から、銀線のやうに細く明かな音——遣り水の音などが沈んで聞えて来る。その音を聞いて居ると、いつの間になら読経の音ともつれる。夜もすがら目ざめがちの人の耳に、水の音と読経の音ともつれ／＼して、森閑とした貴族の邸宅に特有な静かな空気を顔はして清寂な響を伝へて来る。又夜もやう／＼と眺み近くなつて、人の姿、渡殿の形遥かに文殿のあたりまで、しら／＼と見えるやうになつて来た。黎明の微明の中をうちつれだちて行く二人の折禰僧の美はしい浄衣姿が、屋根も欄も彫刻や彩色に意匠を凝らした唐風の渡殿の上をすべり行くのが、ちやうど霧の中へ溶けて行くやうに見える。併しながら更に作者の感性に立入って見ると、それ等の事物的な描写の奥に幽微な感性の流動が見えて来る。たとへば『うつし心をばひきたがへ』を、在来の註釈には宮仕を厭ふ心とのみして

あるのであるが、『なやましうおはしますべかめるをさりげなくもてかくさせ給へり』といふやうに、いかにも円かな和やかな朗かな御心もちを仰ぎて、日ごろ深く思ひこんで居た感想が、がらりと交って宮仕へすることを嬉しく思つて居る心が見えて居る。この二つの心の去來の閃きが、作者の日記にも歌にも物語の中に流れて居る姿であることが明かに見える。」(同上「國語の力」、二八版、一三五—一三七頁)

垣内松三先生は、「紫式部日記」の冒頭の文章を引き、それにみずからの鑑賞を加えて、かなり筆を費された。引いた本文に即して、その作者の意識の流動をさぐつていかれるところに、垣内松三先生のすぐれた感性をうかがうことができる。紫式部日記の独自の感性を、とくに「事物的な描写の奥に幽微な感性の流動」していることを、垣内松三先生は看取されている。紫式部の胸底にある、二つの心の去來のさまを見抜いていられるのである。

垣内松三先生は、さきの文章につづけて、「かうした意識の流動を明かにするのが平安朝文学研究の重なる着眼点であるともいへる。形の見える文といふのはさうした文を手がかりとして、更に深く、文の底に流れて居る意識の流動を看取することである。」(同上「國語の力」、二八版、一三七頁)と述べられた。文章・作品を上「國語の力」、二八版、一三七頁)と述べられた。文章・作品を読んでいくばあい、なにを着眼点として、どのように読んでいくべきかが、ここには示されている。

以上、白石の「折たく柴の記」↓梁川の「回光録」↓紫式部の「紫式部日記」と、「形の見える文」の具体例を挙げつつ、垣内松三先生は、「文の形」を見るとは、どうすることなのかを説かれた。中古・近世・近代にわたつて、それぞれに特色のある文章例が

とりあげられていた。それぞれ、作者の意識の流動のしかた、またその流動のとらえかたが示されていた。三つの文章例の挙げかたにも、その扱いかたにも、漸次深まっていくながら認められた。

さて、垣内松三先生は、以上のような第一四節の叙述につづいて、第一五節では、「文の形を見る力」を、つぎのようにまとめられた。

「文の形を見る力は、文中に流動する作者の意識の形を意識する力である。卓越なる批評家が片言隻句の微を透してよく文中の意識を直観するように、文字言語の表面に囚われないで、優雅なる叙述の中にも悲哀の心を見、平凡なる記述の中にも痛切なる諷刺を見るは、唯この力の発現に外ならぬ。それ故に卓越なる批評家の前に文中の一字一語も皆活力を示現し來るのである。然しながら文の形を見ることは既にいふように解釈の第一の終点であると同時に第二の終点でもあるのであるから、文の形を見る力は解釈の作用の総体であるとも感ぜられるのである。解釈の第一着手にそうした文の形を見ることは、頗る難事であるとも考えられるのであるが、実験心理学の示すいろいろの実験に依つて見ると、読者は文字や語法の知覚を得ると直ぐに文章の感じに導かれて、さら／＼と文を読んで居ることが解る。それがむつかしいと思ふのは読者の態度に依るのであって、決して不自然なことでも、不可能なことでもない。瞿昆湖のいえる語に、一日偶々莊子を読み、『風の積は厚からず。則ちその大翼を負ふや力なし。水の積は厚からず。則ちその大舟を負ふや力なし』という句に到りて恍然として文を書く法を悟つたとあるのも、この心もちを云つたように思われる。最も自然な態度である

時に克く、文字の中を流れて居る意識の流れをやすくと見つけることができるようである。卓越なる指導者がよく人の『学び方』を問うに答えて『読んだらよいのだ』『書いたらよいのだ』というのは機械的な努力を強うるのではなく、不親切ない方をするのであるまい。それは恐らく、自らその態度を体得するが故に他をしてそれを体験せしめんと欲するのであろう。解釈の第一着手は、『自己』を主観を雑えざる純真なる自然の態度に置くことであつて、文の形を見る力は、自らそこから湧き出ずるのではあるまいか。」

(有朋堂版「国語の力」、一二六―一二七)

「文の形」を見る力は、解釈の作用の総体であるとも感ぜられるが、「文の形」を見る力は、「自己」を主観をまじえざる純真なる自然の態度に置くことから、おのずと湧き出ずるものと、垣内松三先生は説かれる。すなわち、「最も自然な態度である時に克く、文字の中を流れて居る意識の流れをやすくと見つけることができるようである。」と説くのである。

垣内松三先生は、また、第一三節の末尾にも、「文の形」をとらえることについて、つぎのように述べていられる。

「又、ゲナングのパラグラフの三分法に見える西洋修辞学の考察等を見ると、少なくとも、表現形式に於ける三分法は、思想を纏め易い根本的な一形式であることを気づくのである。三分されたものを更に分析解剖して文の形の構成を見るのは次に起るところの問題であるが、直下の会得に於てその全形を捉え、その相互の省略の上にも、その相互の転倒の上にも、単に表現形式の上に泥すみて分析から錯誤に陥ることなく、その内面に飛翔する意識の流動をのみ直視する時に、『文の形』は鮮明に意識せらるゝであらう。種々の

煩瑣なる理論や術語や形式に惑わされることなく、意識の流動に乗じ、これに随伴する、極めて自然な態度に於て『文の形』を捉えることから、解釈作用の第一歩が極めて自由に踏み出されると思うのである。特に児童の読方の実際を見る時に、その純一なる態度が、いかによく文の内面に浸透して、その一々を捉える力に富むものであるかを教えられて、深い内省を感ぜずには居られないのである。」

(有朋堂版「国語の力」、一一七―一一八)

垣内松三先生は、直下の会得において、その内面に飛翔する意識の流動をのみ直視する時に、「文の形」は鮮明に意識せられるとし、「種々の煩瑣なる理論や術語や形式に惑わされることなく、意識の流動に乗じ、これに随伴する、極めて自然な態度に於て『文の形』を捉えることから、解釈作用の第一歩が極めて自由に踏み出される」とされた。「極めて自然な態度」が強調されていることは、注目されてよい。

とりわけ、児童の読み方において、その純一なる態度が、文章の内面に浸透して、その一々を捉える力に富むものであることを指摘していられる。垣内松三先生の国語教育学者としての面目を、ここに見ることが出来る。「文の形」を見る力を養うことは、垣内松三先生にとっては、日常生活に発する足下の問題であるとともに、もっとも自然な態度で具現されるべきものであった。(昭和45年2月24日稿) (本学教授)